

2026年3月1日（大齋節第2主日、A年）
メッセージ

「神がいる世界」を見る目

（ヨハネによる福音書3：1-17）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音に登場するニコデモは、大変優秀な律法の教師で、この人が行けないなら、誰が天国に行けるのだろうかと言われるほど、皆から尊敬される人でした。しかし、彼は不安でした。自分は本当に神に認められるだろうか、天国に行けるだろうか。その不安に誘われ、ある夜、彼はイエスのもとを訪れます。昼ではなく夜に訪れたのは、他人の目を気にしたから。つまり高名なユダヤ教の教師である自分がイエスのもとを訪れたことがバレることを恐れたからでしょう。しかし、そうまでしてもイエスのもとを訪れたのは、彼がそれほどに真理を求めていたからです。こうして、イエスのもとを訪れたニコデモとイエスとのやり取りを通して、天の国の真実が明らかにされます。

けれども、彼はイエスの言っていることが分かりませんでした。どんなに知識があっても、尊敬されていても、イエスが言うとおりの「新たに生まれ」なければ、イエスによって示される真理は分からないのです。同じ世界の同じ出来事を見ても、肉の世界に留まっている目で見ると、霊による目で見るとでは世界が異なって見えます。人の目を気にして夜に訪れたニコデモは、まだ肉に留まっていたのです。そのことが、彼が「しるし」にこだわった事に示されています。肉に留まるものは、確信を与えてくれる眼に見える「しるし」にこだわります。

霊による目とは、「神がいる世界」を見る目です。霊の目は、修行を積むことや善行を重ねることで得られるものではありません。水と聖霊によって洗礼を受け、神の子どもとしての新たな命をいただき、神とともにあるその命を生きるなかでこそ、「神がいる世界」への目は開かれます。たしかにこの世界に神がおられること、神の霊がこの世界に吹いていることを信じ、感じて生きること。それによってこそ、霊の目は開かれ、イエスが語ることの真実が分かります。そして霊の目によってこそ、私たちは今この時にも、神がいる世界に生きることができし、この世の出来事を通して、神を知り、天の国の真実を知ることができます。

ニコデモは私たちの姿を代表しているように感じられます。もしも知識が、他者からの目が、この世の名誉が、私たちの霊の目が開かれイエスをまことに知ることを邪魔するのであれば、それらは何の価値もありません。今もここに吹いている霊の語りかけに耳を澄まし、神がいる世界への目が開かれますように。その目が開かれるなら、「神はご自分の独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」という神の愛が「私」に注がれていることを、私たちは知ることができます。